

『ヨハネのアポクリュフォン』（ベルリン写本）

—翻訳と註—

大貫 隆

『ヨハネのアポクリュフォン』は、いみじくも「グノーシス主義教説の綱要」(C. Schmidt/W. Till) と呼ばれるおり、グノーシス主義——特に、いわゆる神話論的グノーシス主義——の世界観を知る上で最も重要な文献の一つである。復活のイエスが弟子のヨハネに、エルサレムから程遠くない荒野で現れ、秘かに解き明かした教え(*ἀπόκρυφον*)という体裁の下に、グノーシス主義の神観、宇宙観、人間観、終末論、救済論が稀に見る首尾一貫性を保ちつつ、神話の形式で物語られる。この体裁が示すように、現在の形での『ヨハネのアポクリュフォン』は、いわゆるキリスト教グノーシス主義の一文書であるが、本論部の神話そのものへのキリスト教の影響は比較的軽微である。すなわち、本論部の神話はもともとキリスト教とは無関係に、おそらくユダヤ教の周縁で成立していたものと考えられる。一世紀後半に活躍した古カトリック教会の教父エイレナイオス(イレネウス)が代表作『異端反駁』の第一巻二九章で、われわれの神話をすでにキリスト教化された形で抜粋報告しているから、元來の神話は遅くとも一世紀半ばには著されていたものと推定される。成立地はエジプトと思われる。また、多様なグノーシス主義諸分派の中では、いわゆるセツ派の系譜に帰す学説(H.-M. Schenke)が有力である。

元來はギリシャ語で著されたことがほぼ確実であるが、現存するのは——前記のエイレナイオスによる抜粋(ラテ

ン語）を別にすぬる——即ちの「アラビア語訳のみである。その中の三つは、一九四五年にこねるナグ・ハマディ文書の一端として発見されたもので、それを取められた本の番号、およそその写本の中での文書（巻十）番号を組み合ひて NHC (=Nag-Hammadi-Codex) II, I; III, I; IV, I と表記される（校訂本は M. Krause/P. Labib, Die drei Versionen des Apokryphon des Johannes im Koptischen Museum zu Alt-Kairo, Wiesbaden/Glückstadt 1962）。しかし、エジプト出土のせりふは別で、これは「マルリント本」——正確に云々 Papyrus Berolinensis Gnosticus 8502 (=BG と略記、現在は東ベルリンのペルガモン博物館所蔵)——は第一文書として取められてこねるやうな。この写本はナグ・ハマディ文書の発見に先立つて半世紀、すなは一八九六年以来その存在が知られていた。コプト教会史の研究者カール・シムミット (Carl Schmidt) が一九〇五年に殆ど校訂出版田前まで漕ぎつけたものの、印刷屋の水道管破裂といつ不慮の事故の巻を添へて頓挫してしまった。それ以後も新たな校訂出版の努力が続けられたが、ハリハムの死、第一次世界大戦といつ障害に加えて、ナグ・ハマディ文書の発見に伴つて必要となつた (特に NHC III, I の) 校訂作業のために校訂版の刊行は大幅に遅延し、やがと一九五五年に W. ティル (Till) による第一版が刊行され、続いて H. M. シュンケ (Schenke) による改訂第一版が一九七一年に現れてこね (Die gnostischen Schriften des koptischen Papyrus Berolinensis 8502, hrsg., übers. u. bearb. v. Walter Till, 2. erweiterte Aufl. v. H.-M. Schenke, Akademie-Verlag, Berlin 1972)。

団のコプト語訳は伝承史的には二系統に分かれ。NHC II, I と IV, I は III, I と BG とはなに大挿入記事などを含む、分量的にそれだけ長くなつてゐる。II, I の本文は極めて良好な保存状態であるのに反し、IV, I は小形な断片の集まりにあらざる。III, I と BG の間に BG の本文がほぼ完全に保存されたものに対し、III, I は断頭の団葉 (内容的には BG24, 5 も同じ該当) を欠いてゐる。このため文書の全貌を知る上では II, I と BG が重要となる。筆者は

以下の BG の翻訳に続けて II, I のそれも準備中である。われわれの文書がグノーリー・シス主義研究に対する有する重要性にもかかわらず、これまで邦訳としては、荒井献氏の個別研究（『原始キリスト教とグノーリー・シス主義』、岩波書店一九七一年、一九六頁以下）での極めて限られた引用を別にすると、まとまつた形の翻訳がなく、本稿が初めての全訳である。講義資料としての役割も考えての試みであるが、同時に最近の研究文献との接衝にも可能な限り努めている。具体的には、翻訳底本（前記の改訂第二版）とは異なる続みを採用した箇所が少なからずあり、その根拠付け、および他の欧米語訳との突き合せは、いずれも訳註で行っている。ただし、この訳註は紙幅の都合上、本論集の次号以降に別に寄稿の予定である。

最後に訳文で用いられている記号の意味は次のとおりである。

〔 〕=破損された本文を校訂者または訳者が推定復元した読み

へゝ=原本の写字楼生が書き落したと思われる文または単語

()=原本がギリシャ語を借用していることを示すため、あるいは文意を取り易くするために訳者が行つた補充
なお、段落表示は写本の頁および行数を基準としている（例えば 19⁶ は写本の一九頁第六行の意）。しかし、コプト語本文の語順を日本語で保持することは殆どの場合不可能である。その結果、頁毎および五行毎に行っている表示は、原本の区切りに必ずしも厳密に対応するものではなくなっている。あくまで日安を示したものである。

前文と状況設定（枠） 19₆—22₁₆

(19⁶)さて(83)その頃のある日のこと、ヤコブの兄弟ヨハネ——とはすなわちゼベダイの子らのことである——は宮（神殿）に登った。彼が宮に登り着いたとき、(10)アリマニアスという名のパリサイ人(*parricidios*)が近づいてき

て、こう語りかけた。——「君が付き従っていた君の主人はどこかね」。彼（ヨハネ）は答えて言った、(15)「彼がそこからやつて来られたところ、そこへ再び帰つてゆかれました」¹。するとそのパリサイ人(*parrasaios*)が彼に言った、「そのナザレ人(*Naz̄opaios*)は君たちをだまして(*πλάνη*)迷わせ(*πλανᾶν*)、君たちの耳を嘘で「いっぽい」にしたのだ。²(20-)また、「君たちの心」を開示し³〔こ〕、君たちの「父祖」の言ふばえ(*ταπάδος*)から君たちを引き離してしまつたのだ。私はこれを聞いたとき、(5)神殿(*ἱερόν*)を立ち去つてあの山へ、と或る荒涼たる場所へ向つた。私は心に深く悲しんで(*λυπεῖσθαι*)、こう言つた、「でも何故(*πῶς*)救い主(*ωρῆς*)は立てられた(*κεραυνῶν*)のだろうか。また、何故彼は(10)、彼を遣した父によつてこの世(*κόσμος*)に送られたのだろうか。彼の父とは誰のことなのか。また、私たちがやがてそこへとゆくであろうあのアイオーン(*αιών*)とは、どんな性質のものなのかな。彼は私たちに、(15)『この(目の前の)アイオーン(*αιών*=世界)はあの不朽のアイオーン(*αιών*)のかたち(*τύπος*)を受取つてゐる』とは語つたが、かのアイオーンがどのようなところなのかな、これはまだ何も説明してくれなかつた。さて、私がこう思いめぐらしていたとき、(20)突然諸々の天が開けて、全被造物が照り輝いた。——(21-)天(单数)「の下へ降りてきた」光に照らされて。そして世界(*κόσμος*)「全体が揺れ動いた」。私は恐しくなつて「倒れ伏した」。すると、見よ、私の前に一人の子供が〔現れた〕。⁵(5)しかし⁶〔私には〕(突然)その像が老人であるように〔見え〕、その中に光があるのが〔見えたので〕、「私はじつと」その像を〔見つめてみた〕。(しかし)私には〔こ〕の奇跡が〔理解でき〕なかつた。すなわち、(今度は)「一人の女」が多くの形(*μορφή*)をして「光の中に」いたのである。¹⁰その女の形(*μορφή*)はいろいろに入れ〔代り〕ながら〔見えていた〕。(私はこう思つた)もし彼女が一人だとしたら、「どうして」彼女は三つの姿をしているのだろうと。(すると)彼が〔私に言つた〕、「ヨハネよ、な〔ぜ君〕は疑うのか」。⁷(15)それに続けて⁸(εἰπα)「彼は言つた」、「君はこの〔現〕象(*ἰδέα*)に慣れていないとでも(*ταῦ*)言うのか。怖じ〔け

る」な。〔私〕は何時でも〔君たち〕と共に〔いる〕。私は⁽²⁰⁾「父であり」、〔私は〕母であり、私は「子である」。私は⁽²²⁾¹「永遠に在る者、汚〔し〕得ざる者」である。〔何故なら〕彼と混り合つような〔者は誰〕一人いなからである。⁸さて今「や私は」君に説き明かすために「やつてきた」。現に今在るもののが「何であり」、「かゝて在つた」ものが何であり、(5)やがて成る「べき」ことが何であるかを。それは君が見えざるもの（複数）、また、見える「もの」（複数）を「認識する」ためであり、完〔全なる〕⁽²¹⁾〔deleios〕人間について「教えを聞く」ためである。⁽¹⁰⁾さあ、君の〔顔を上〕げなさい。⁹そして私が今〔日〕君に語つて聞かせること（複数）を聞いて「理解しなさい。それは」君自身がそれを〔れ〕をさうに〔君と同じ〕靈の⁽²²⁾〔pneuma〕仲間、とはすなわち、⁽¹⁵⁾〔完全〕なる⁽²³⁾〔deleios〕人間に属する搖〔らぐ〕ことのない種族⁽²⁴⁾〔renéa〕「から」の者たちに宣べ伝え、そして「彼らも」理解する⁽²⁵⁾〔noēti〕ようになる「ためである」。

至高の存在について 22¹⁷—26¹⁹

彼は私に語つた、「〔單一〕性は単独支配^(monarchia)の」とあるから、さうにその上に支配する^(dóxēi)〔者は存在しない〕。(それは)〔眞の〕神、⁽²⁰⁾万物の父、聖〔なる靈〕〔pneuma〕、万物の上に〔在〕つて見えざる者、不滅性〔aphantasia〕の中に〔在る〕者、⁽²³⁾¹純粹なる光——すなわち、いかなる視力でも見つめることができないほどの光——の〔中に在る〕者である。彼、すなわち靈〔pneuma〕を、神であると⁽²⁵⁾〔考えるのも〕、また〔が〕何かその種の性質をしていると考えるのも適當ではない。⁽⁵⁾何故なら⁽²⁶⁾〔ráp〕彼は神（々）よりもすぐれた者であるから。彼は何人といえどもその上に支配する^(dóxēi)、¹³〔とがない〕支配^(dóxēi)である。¹⁴何故なら⁽²⁶⁾〔ráp〕何人といえども彼に先立つて存在する者ではなく、彼は彼ら（複数）を必要とし^(—)〔xosía〕ない^(ovdē)からである。また、彼は生命も必要とし

ない。(10)何故なら (*ráō*)、永遠なる者であるから。彼は何一つ必要とするもの (—*xρeίa*) がない。何故なら (*ráō*) 彼は（何かによって初めて初めて）完成されるといふことのありえない者であるから。彼は完成される必要のある方ではなく、むしろ (*ἀλλά*) 何時でも完成そのものなのであるから (*ως*)。彼は光である。¹⁷(15)彼は限定不可能である。彼を限定するべく彼に先立つて在る者は一人もいないからである。(彼は) 断定し難い者 (*ἀδικητός*) である。彼を断定する (*διακρίνειν*) べく彼に先立つて在る者は一人もいないからである。(彼は) 測り難き者である。¹⁸(20)彼に先立つて在ったかの如くに (*ὡς*) 彼を測つた者は一人もいないからである。(彼は) 目に見えざる者である。¹⁹(24)

¹ 何人も彼を見たことはないのだから。(彼は) 永遠なる者であり、永久に (*ἀεί*) 存在する。(彼は) 記述し難き者である。何人も記述しようとして彼を把握したことがないのだから。(彼は) その名前を呼ぶことのできない者である。(5)彼より先に在つて彼に名前を付けた者は誰一人いないのだから。彼は測り難き光、聖なる、純粹なる (*καθαρόν*) 潔さ、記述し難き者、完全なる者、不朽なる者である。彼は(10)完成 (—*τέλειος*) でも (*οὖδε*)、神性でさえもなく、むしろ (*ἀλλά*) 、それよりはるかにすぐれたものなのである。彼は無限定 (*ἀπειρός*) でも (*οὖδε*)、限定されたものでも (*οὖδε*) なく、(15)むしろ (*ἀλλά*) 、それよりはるかにすぐれた者である。何故「なら」彼は身体的 (*σωματικός*) でもなければ、非身体的 (—*σῶμα*) でもないからである。彼は大きくも小さくもない。彼はどの位の大きさと叫べるような者ではない。彼は如何る被造物でもない。また何人といえども彼を捕捉する (*νοεῖν*)、じとができるない (*οὖδε*)。²⁰そもそも何か存在するものではなく、むしろ (*ἀλλά*) それ (複数) よりもっとすぐれたものである。(しかし、それは) 本当は彼が (それ自身として) すぐれたものであるかのような意味ではなく (*οὐχ ως*)、むしろ (*ἀλλά*)、(25)

彼は (すべてのものから全く異なつた) 独自の者であるから、或るアイオーン (*αιών*)²¹ の一部に与る (*μετέχειν*) ところではないのである (*ὡς*)。彼には時間といふものが属わない。何故なら (*ráō*)、或るアイオーン (*αιών*) の一部に与る

(*μετέκειν*) 者（がいるならば）、（彼以外の）他の者たちが彼のために準備をしたのだから。²¹ (5) また、彼には時間が分与されたことがない。それを分与する誰か他の者がいて、（その者から何かを）彼が受取るということはないのだから (*εἶς*)。彼は何も必要（—*κοσία*）としない。彼に先立つ者は誰一人としていない。²² (10) 光の完成の中に自分自身を求める (*αιτεῖν*)。彼は、その混り氣なき (*ἀκέραιον*) 光を認識する (*νοεῖν*)。²³ 測り難き大きさ、永遠なる者、永遠性を分け与える者、光、¹⁵ 光を分け与える者、生命、生命を分け与える者、至福なる者 (*μακάριος*)、至福（—*μακάριος*）を分け与える者、認識、認識を分け与える者、常に善なる者 (*ἀγαθός*)、善 (*ἀγαθόν*) を分け与える者、善 (*ἀγαθόν*) を行う者。²⁴ (20) 彼がこのような者であるのは、彼がこれらを持っているからではなく (*οὐχ οἷον*)、むしろ (*ἄλλα οἷον*)。彼が（それらを）分け与えるからである。憐みを与える憐み、恵みを分け与える恵み、測り難き光。²⁵ (26) ——この把握し難き者——とはすなわち、光の像のことである——について私は君に何を語つたらよいであろうか。私が理解し得るであろうその限りで (*πορᾶς*)——と言つのも (*ῥάρο*)、一体誰がいつの日か彼を理解する (*νοεῖν*) であろうか——、(5) また、私が君に話すことができるところに従つて (*κατὰ*)（語ることにしよう）。彼のアイオーン (*αιών*) は不朽である。彼は安息の中に在り、沈黙の中に安らいでいる。彼は万物に先立つて存在する者である。しかし (*δέ*)、彼はすべてのアイオーン (*αιών*) の頭である。²⁶ (10) もし彼のそばに何か別の「もの」が在るのだとすれば。と言うのは (*ῥάρο*)、この測り難き方に係る事柄を知る者は、この方の中に住んでいた者を除いては (*εἰ μή τι*)、我々の中には誰一人としていないからである。これらのことを持たんのは彼である。¹⁵ (15) 彼は、自分を取り囲んだ彼自身の (*ἴσων*) 光の中で自己自身を把握する (*νοεῖν*) 者、とはすなわち、生命の水の泉 (*πηγή*)、清浄さに満ち満ちた光である。

靈 (*πνεῦμα*) の泉 (*πηγή*) が、(20) 光の活ける水から流れ出て、すべてのアイオーン (*αιών*) と (27⁻) あらゆる形の世界 (*κόσμος* 棲数) の支度をした (*χορηγεῖν*)。彼は自分を取り巻く純粹なる (*καθαρὸν*) 光の水の中に彼自身の像 (*εἰκόνα*) を見たとき、それを認識した (*νοεῖν*)。²⁵ すると彼の「思考」 (*εὑνοΐα*) が活発になつて現れ出た。それ（「思考」）は光の輝光 (*λαμπτῆδων*) の中から前へ歩み出た。——すなわち、これが万物に先立つ力であり、(10) (今や) 現れ出たものである。これがすなわち万物の完全なる「アロノイア」 (*πρόνοια*)、光、光の似像、見えざる者の影像 (*εἰκών*) である。それ（三人称、女性、单数）は完全なる (*τελεία*) 力、バルベロ、栄光の完全なるアイオーン (*αιών*) である。¹⁵ 彼女は彼を褒め称えた。彼女は彼によつて現れたからである。そして彼女は彼を認識する (*νοεῖν*)。彼女は最初の「思考」 (*εὑνοΐα*)、彼の影像 (*εἰκών*) である。彼女は第一の(20)人間²⁹となつた。これはすなわち、処女なる (*παρθενικόν*) 靈 (*πνεῦμα*) のことであり、二倍男性的なる者、(28⁻) 二つの力と二つの「名前」と二つの生殖を備えた者、不老かゝ男女なるアイオーン (*αιών*) であり、彼のプロノイア (*πρόνοια*) から現れ出した者である。¹⁵ そのバルベロは、「第一の認識」を自分に与えてくれるようにと彼に請い求めた (*αἰτεῖν*)。彼はそれを承認した (*κατανεύειν*)。彼が承認した (*κατανεύειν*) ジヤ、「第一の認識」が現れてきた。彼女は「思考」 (*εὑνοΐα*) ——¹⁰ とはすなわち「アロノイア」 (*πρόνοια*) のことである——と共に立ち、見えざる完全なる (*τέλειος*) 力 (*δύναμις*)、すなわちバルベロを褒め称えた。³¹ 彼女は彼女（バルベロ）によって在るようになつたからである。再び (*πάλιν*) その力は自分に「不滅性」 (*ἀφθαρτία*) を与えてくれるよう請い求めた (*αἰτεῖν*)。¹⁵ すると彼は承認した (*κατανεύειν*) ジヤ、「不滅性」 (*ἀφθαρτία*) が現れてもだ。彼女は「思考」 (*εὑνοΐα*) ジヤ、「アログノーンス」 (*πρόγνωσις*) と共に立つが、³³

あの見えざる者とバルベロを褒め称えた。(20)彼女は彼女(バルベロ)のゆえに在るようになったからである。(29-1)
 彼女(バルベロ)は「自分に」「永遠の命」を与えてくれるように請い求めた(*aitew*)。(すると)彼は承認した(*katauevw*)。彼が承認した(*katauevw*)とき、「永遠の命」が現れてきた。そして彼らは立って、(5)彼とバルベロを褒め称えた。何故なら、彼らは彼女(バルベロ)ゆえに見えざる靈(*pneuma*)の啓示によつて在るようになったからである。これが「第一の人間」である父のアイオーン(*aiōn*)の五個組である。³⁵——(10)すなわち、見えざる者の影像(*eikōn*)——とはすなわち、バルベロ——、「思考」(*ēnōia*)、「第一の認識」「不滅性」(*āpθapōia*)、および「永遠の命」である。³⁶これが(15)男女^{おも}的なる五個組であり、第一〇番田のアイオーン(*aiōn*)、すなわち生まれれる(*ārēm̄tos*)父の父である。³⁷彼女、すなわち純粹なる光バルベロは、彼をじっと見つめた。(30-)彼女は彼の方へ向きを変え、(そして)至福なる光の飛沫(*oūuθōpō*)を生み出した。しかし(*δέ*)、それ(三人称、男性、単数=「飛沫」)は偉大さにおいて彼女と等しくはなかつた。これが(今や)父の前に現れた独り子⁽⁵⁾(*monorevns*)であり、神的な「アウトゲネートス(*autorevn̄tos*)³⁸であり、混りなき(*εἰλικρωές*)光の靈(*pneuma*)のものなる万物の中で最初に生まれた御子である。(10)見えざる靈(*pneuma*)は、その光を、すなわち今まさにあの第一の力、つまり彼の「プロノイア」(*πρόνοια*)なるバルベロによって現れてきたその光を喜んだ。そして彼はそれを彼の至善(—*xōnōtōs*)によつて塗油した。(15)そこで(*ώστε*)それは完全(*τέλειος*)かつ欠乏なき者となり、キリストとなつた。彼(父=見えざる靈)が彼の至善(—*xōnōtōs*)³⁹やもつて塗油し、見えざる(*άόρατον*)靈(*pneuma*)のものとしたからである。⁴⁰彼(キリストまたは「至善なる者」)は彼(父)の前に現れ出た。(20)そして塗油を受けた(31-)——「処女なる(*παρθενικόν*)」靈(*pneuma*)から。彼は「彼(処女なる靈)の前に立ち」、「見えざる」靈(*pneuma*)と「完全なる「アロノイア」(*πρόνοια*)を褒め称えた。——すなわち、その中〔に〕彼が(それまで)住んでいたこの靈を。(5)それから彼は自分にただ一つのものを与えてくれるよ

うに彼に求めた (*aítein*)、すなわち叡知 (*noûs*) を。見えざる (*áópatov*) 靈 (*pneûma*) がそれを承認した (*kataueñ-ew*)。叡知 (*noûs*) が現れできた。(そして) キリストと共に立つて⁴¹、彼 (見えざる靈) とバルベロとを褒め称えた。⁴²
(10)しかし、これらすべてのものは沈黙と思考 (*énnoma*) の中に成立したのである。(さて) 見えざる (*áópatov*) 靈 (*pneû-⁴³-ma*) は或る事を為そうと欲した。(すると) 彼のその「意志」が形を取つて現れてきた。それは叡知 (*noûs*) と(15)光と共に立つて、彼を褒め称えた。その「意志」の後には「ローハス」 (*lóros*) が続いた。何故なら (*ráio*) キリストは「ローハス」 (*lóros*) によってすべてのものを創造したのであるから。神的な「アウトゲネース」 (*autorevñs*)、「永遠の命」、「意志」、(20)それと (*ðe*)⁴⁶ 「叡知」 (*noûs*)、「プログノーシス」 (*prógnosis*) は (32⁻) (共に) 立つて [見えざる]
(*áópatov*) 靈 (*pneûma*) と「バルベロ」を褒め称えた。「何故なら」彼らは彼女 (バルベロ) によって在るようになつたからである。⁴⁷彼らは〔神的な〕(5)永遠なる「アウトゲネース」 (*autorevñs*)、バルベロの御子の靈 (*pneûma*) によつて〔完全とされた〕。⁴⁸何故なら彼 (アウトゲネース) が、彼、すなわち永遠なる、処女なる (*parthenikón*)、見えざる (*áópatov*) 靈 (*pneûma*) のむく歩み出たからである。「アウトゲネース」 (*autorevñs*) なる神、キリストじゃ、(10)彼 (見えざる靈)⁴⁹ が大いなる栄誉をもつて称えた者である。何故なら彼 (アウトゲネース) は彼 (見えざる靈) の最初の「思考」 (*énnoma*) から在るよつになつたからである。この (アウトゲネース) を見えざる靈 (*pneûma*) は万物の上に神として任命した。真の神は(15)彼にすべての権限 (*ékonoma*) を与え、彼の中に宿つてゐる真理を彼 (アウトゲネース) に従わせた (*þporáossev*)。それは彼が万物を把捉する (*noûs*) ためである。すなわち、その御名が彼にふさわしい者たちに語られる事になるであろうその彼が。⁵⁰さて (*ðe*)、その光——とはすなわちキリストのことである——と「不滅性」 (*áphiapdia*) から、(33⁻)⁵² 「光の」⁵³ 神の手によつて四つの大いなる光が神的アウ「トゲネース」 (*au-*toresvñs**) から現れてきた。それは (それら四つの光が) 彼および三つのもの、すなわち「意志」 (5) と「思考」 (*énnoma*)

と「(永遠の) 命」の⁵⁵上に立つためであった。それで (δέ), ものの圓⁵⁶とは、「恵み」(*xápos*) と「理解」(*oúreos*) と「知覚」(*aisthēos*) と「思慮」(*phrónēos*) である。「恵み」(*xápos*) は (*μέν*) 第一の光ハルモゼール——とはすなわち第一のアイオーハ (*aiōn*) である光の天使 (*ánthenos*)——(に隕)てこぬ。⁵⁷そこ (第一のアイオーン) には三つ⁵⁸のアイオーン (*aiōn*)、⁵⁹「恵み」、「真理」、そして「かたね」(*μορφή*) が在る。オーロイアエール、すなわち彼 (アウトゲネース) が第一のアイオーン (*aiōn*) の上に立てた (*καθιστάναι*) 第一の光には三つのアイオーハ (*aiōn*) があり、「プロノイヤ」(*prónous*)、「知覚」(*aisthēos*)、および「想起」がそれである。第三の光ダバイトを彼は第三のアイオーハ (*aiōn*) の上に立てた (*καθιστάναι*)。⁶⁰三つに三つ三つのアイオーハ (*aiōn*)、(34)⁶¹ すなわち「理解」(*oúreos*)、「愛」(*áphētē*)⁶²、「現象」(*lóea*)⁶³ が在る。やうに (δέ)、第四の光エレーネー⁶⁴トを彼は第四のアイ [オーン] (*aiōn*) の上に立てた (*καθιστάναι*)。⁶⁵そこには三つのアイオーハ (*aiōn*)、すなわち「完全」(*—téleios*)、「平安」(*eípérin*)、「知惠」(*soφia*) が在る。これが神的な「アウトゲネットール」(*autorenéto*) の⁶⁶上に立てた四つの光である。⁶⁷第三十、すなわち大いなる「アウトゲネットール」(*autorenéto*) キリストの⁶⁸上に立てた (*παριστάναι*) 三つのアイオーハ (*aiōn*) であり、見⁶⁹れ⁷⁰る (*ádpatov*) 靈 (*pneuma*) なる神の決定 (*εῦδοκία*) である。これが三つのアイオーン (*aiōn*) は御子、⁷¹すなわち生⁷²まれた者 (「アウトゲネットール」*autorenētos*) に属する。あるいはものが聖なる靈 (*pneuma*) の意志により、「アウトゲネース」(*autorenēs*) によって堅くされた。やうに (δέ)、「策」の認識」⁷³および完全なる (*téleios*) 「叡知」(*noûs*) から、神にみる、(35)⁷⁴「あた」大いなる「見⁷⁵」や⁷⁶ (*ádpatov*) 靈 (*pneuma*)⁷⁷の決定 (*εῦδοκία*) による、また「アウトゲネットール」(*autorenēs*) の「決」定 (*εῦδοκία*) による、「決」全なる (*téleios*) 真の人間 (が成立した)。(それは) 第一の啓示である。⁷⁸彼は彼をアダムと名付け、第一のアイオーン (*aiōn*) の上、大いなる神、すなわち「アウトゲネットール」(*autorenēto*) なるキリストの⁷⁹上に、つまり第一のアイオーハ (*aiōn*)、

ハルモゼールの中に置いた。(10)そして彼の力（複数）が彼と共にあった。そして見^れれる (*ἀόρατον*) 靈 (*πνεῦμα*) は彼に凌駕し難い精神の (*νοερόν*) 力を付与した。彼（アダム）は言^つた。『私は見^れれる (*ἀόρατον*) 靈 (*πνεῦμα*) を褒め称えます。何故なら、(15)すべてのものはあなたのゆえに在るようになったのであり、すべてのものがあなたに向^つているからです。私はあなたと「アウトゲネース」 (*αὐτογένης*) とアイオーン (*αιών*・複数⁶⁰)、すなわち父と母と子の三つ、(および) (20)完全なる力を褒め称えます⁵⁹』。それから彼は彼（アダム）の息子セツを (36¹) 第二の光、[オーロ] イアエールの上に置いた (*καθιστάνω*)。やがて (δέ) 第二のアイオーン (*αιών*) にはセツの [子孫 (*σπέρμα*)] が置かれた (*καθιστάνω*)。それは(5)永久に第三の光ダベイテの中に在り続ける〔聖〕徒たちの魂 (*ψυχή*) である。やがて (δέ) 第四のアイオーン (*αιών*) には、自分たちの完成を知ったのに、直ちには悔い改め (*μετανοεῖν*) ず、(10)むしろ (*ἀλλά*) しばらくの間たぬけた後、最後には (δέ) 悔い改めた (*μετανοεῖν*) 魂 (*ψυχή*) が置かれた (*καθιστάνω*)。彼らは第四の光、すなわち彼らを自分に結び付けたエーレーレートのもとに留まり、(15)見^れれる (*ἀόρατον*) 靈 (*πνεῦμα*) を褒め称えるであろう。

過失 $36^{16} - 38^{14}$

しかし、我々の仲間なる姉妹、すなわち「知恵」 (*σοφία*) は、——彼女（もまた）一つのアイオーン (*αιών*) だあつたので——自分一人で或る考えを抱くに至つた。そして彼女は靈 (*πνεῦμα*) の考え方(20)「第一の認識」によって (37¹) 自分の中から（自分の）〔影像〕を出現させたいと欲した。靈 (*πνεῦμα*) は彼女「に」同意⁶²も (*οὕτε*) 承認⁶³も (*κατανεύειν*) していなかつたにも拘らず。また彼女の伴侶 (*σύζυγος*)、(5)すなわち男性なる、処女なる (*παρθενικόν*) 精神 (*πνεῦμα*) も同意 (*συνενόησειν*) していなかつた (*οὕτε*) にも拘らず。彼女は贊同者 (*σύμφωνος*) を見出せなかま

に、(すなわち) 靈 (*πνεύμα*) の同意 (*εὐδοκία*) がないまま、彼女自身の賛同者 (*σύμφωνος*) が知らない中に、(自分で) 承認 (*κατανέύειν*) —、⁶⁴ (彼女の中にある) 情欲 (*προύνουν*) のゆえに流出した。彼女の (この) 考えは無為 (*ἀρόν*) のままでいる——ことができなかつた。彼女のわざが現れ出た。(それは) 不完全で醜惡な⁽¹⁵⁾外貌をしていた。といつても彼女は彼女の伴侶 (*αὐτούρος*) なしに (それを) 作り出したからである。そしてそれは母親の姿に似ていなかつた。(母親とは) 異なる形 (*μορφή*) をしていただからである。そこで (86) 彼女が思案しつつ見てみると、それは⁽²⁰⁾別の形 (*τύπος*) の外貌になつていた。蛇とライオンの外貌を呈していただからである。彼の [田は] (38¹) 火のような光を放つていた。〔彼女は〕それを自分こそばかり投げ捨てた。かの場所 (*τόπος*) から外へ。それは不死なる (*ἀθάνατος*) 者たちの誰一人としてそれを見ることがないようにするためであつた。⁽⁵⁾といつのも、彼女はそれを無知の中に生み落してしまつたからである。彼女は彼に光の雲を〔巻き〕付けて、その雲の真中に玉座 (*θρόνος*) を置いた。⁽¹⁰⁾それは聖靈 (*πνεύμα*)——これは「ゾーヨー」 (*Zoē*)、万物の母と呼ばれる⁶⁵——の外には (*εἰμι*) 誰も彼を見ることがないようにするためであつた。彼女は彼にヤルダバオトと名前を付けた。

やみの世界 38¹⁴—44¹⁹

これが第一のアルコーン (*ἄρκων*)⁶⁶ である。⁽¹⁵⁾これは母親から多くの力を引き出した。彼は彼女から遠ざかり、彼が生まれた場所から離れた。^(39¹) 彼は (それとは) 別の場所を手に入れた。彼は自分のために一つのアイオーン (*αιών*) を造り出した。それは光り輝く火のように燃えていて、彼は今なおそこにいるのである。それから彼は⁽⁵⁾彼と共に「無理解」 (*ἀπνοία*) と結びついた。彼は彼に従う諸力 (*ἐξουδία*) と十一人の天使 (*ἄγγελος*) を呼び出した。彼のアイオーン (*αιών*) のためにそのいざれをも不朽 (*ἀφθαρτος*) の⁽¹⁶⁾アイオーン (*αιών*・複数) を範型 (*τύπος*) とし

て（造り出した）。それからそのおののために七人ずつの天使 (*ἄρρελος*) を、またその天使たちには（おののおの？）三つの力——すなわち、彼に従う者は全部で(15)二六〇人の天使群 (*ἄρμελία*) および彼の第三の光となる⁶⁹——を、彼より先に存在する第一の範型 (*τύπος*) の外見に従つて造り出した。さて、この諸力 (*έξουσία*) が(40-)かの「アルキゲネトール」(*ἀρχιγένετωρ*⁷¹)、すなわち暗黒のアルコーン (*ἀρκών*)、彼らを生み出した者の無知から現れてきたとき、彼らの名前は次のとおりであった。(5)第一の者はヤオート、第二の者はヘルマス——これは火の日のことである——、第三の者はガリラ、第四の者はヨーベール、第五の者はアドーナイオス、(10)第六の者はサバオート、第七の者はカイナンとカエー、すなわちカインと呼ばれる者——これは太陽のことである——、第八の者はアビレッシネー、(15)第九の者はヨーベール、第十の者はハルムピアエール、第十一の者はアドーニン、第十二の者はベリアスである。他方 (86)、彼らはすべて(20)欲望 (*ἐπιθυμία*) (41-)と怒り (*ὀργή*) から由来する別の名前を持っている。これら（の諸力）はすべて彼らに付けられた別の二重の名前を持つている。これら（の名前）は天（单数）の栄光によって彼らに与えられたのである。(5)さらに (86)、これら（の名前）は彼らの本性 (*φύσις*) を現す真理に即して (*κατά*) 付けられている⁷²。そしてサクラス⁷⁴は想像 (*φαντασία*) と彼らの力とに従つてこれらの名前で彼らを呼んだのである。時を経るにつれて(10)彼らは遠ざかり、弱くなるが (*μέν*)、しかし (86)（また）それ（時）によつて力を得て大きくなる (*αὔξανεν*) のが普通である。そして彼は、七人の王たちが天（複数）を支配し、五人の王が(15)奈落界の混沌 (*χάος*) の上に支配することに定めた。さて (86)、七つの天の上に支配する者たちの栄光の名前は次のとおりである。第一はヤオート、ライオンの顔をした者、第二はエローアイオス、驢馬の(20)顔をした者、第三はアスタファイオス (42-)、ハイエナの顔をした者、第四はヤオ、七頭の蛇の顔をした者、第五はアドーナイオス、竜（—*δράκων*）の顔をした者、第六は(5)アドーニ、猿の顔をした者、第七はサバタイオス、ぎらつく炎の顔をした者である。これが週 (*օρθοπατοῦ*)

の七個組である。これが⁽¹⁰⁾世界 (*kósmos*) を支配する者たちである。だが (*δέ*) サクラスなるヤルダバオトは多面相 (*—Hypothý*) であるので (*ώστε*)、その欲するところに従い (*πρός*) あらゆる姿（顔）で自分を現す。彼は彼自身の火と⁽¹⁵⁾彼の力（の何がしか）を彼らに分け与えた。しかし (*ὅτι*)、あの力の純粹なる光、すなわち彼が母親から引き出して⁽⁷⁶⁾いた光、これは彼らに分与しなかった。彼が彼らの上に君臨したのはこのため、すなわち (*43¹*) 母親の「光の」力ゆえに彼に備っていた〔采光〕のためである。〔この〕ゆえに〔彼は〕自分を「神」と呼ば「せ」、（そのことによつて）、⁽⁵⁾彼がそこから由来している本質 (*ὑπόστασις*) に反逆した (*—πείθειν*) のである。そして彼は諸力 (*ἐξουσία*) に七つの勢力を結びつけた。彼が語ると、それによつてそれら（の勢力）が成立した。彼はそれらに名前を付け、諸力 (*ἐξουσία*) を⁽¹⁰⁾任命した (*καθοράω*)。それで (*οὖν*) 第一（の勢力）は「プロノイア」 (*πρόνοια*)⁽⁷⁷⁾ で、第一の者ヤオートのもとにある。第一は「神性」で、第一の者⁽¹⁵⁾エローアイオスのもとにある。第二は「善」 (*καλός*) で、第二の者サバオートのもとにある。第三は「火」⁽⁷⁸⁾ で、第四の者ヤオーのもとにある。第四は「火」⁽⁷⁹⁾ で、第五の者サバタイオスのものにある。第五は「王國」で、第五の者アスターのものにある。第六は「理解」 (*σύνεσις*)⁽¹⁾ で第六の者アド「一二」の「めど」である。第七は「知恵」 (*σοφία*) で、第七の者サバタイオスの「めど」である。⁽⁵⁾これらの者たちは天⁽⁷⁹⁾ごとに (*κατά*) 層穹 (*στρεμέωνα*) を持ち、太初から存在するアイオーン (*αιών*)⁽⁷⁹⁾ の形に従い (*κατά*)、不朽なる者たちの範型 (*τύπος*) に従つて (*κατά*) アイオーン (*αιών*・单数) を持つてゐる。さて (*δέ*)、彼は⁽¹⁰⁾自分の下なる被造物と彼に従う天使たち (*ἄγγελος*) の群、すなわち、彼によつて在るようになった者たちを見た。そして彼らにこう言つた、『私は妬む神である。⁽¹⁵⁾私の他に神はない』。（このことによつて）すでに (*ἥδη*) 彼は、彼に従う天使たち (*ἄγγελος*) に向つて、（彼より）他に神がいることを（思わず）漏らしてしまつたのである。何故なら (*ταῦτο*)、もし他に神がいないのならば、彼は一体誰に対して妬むというのか。

やがて、あの母親は揺れ動き (*ἐπιφέρεσθαι*) (45[—]) 始めた (*ἀρχεσθαι*)。彼女は自分の欠乏に気付いたのである。すなわち、彼女の伴侶 (*αὐτὸν*) が彼女に同意 (*συμφωνεῖν*) してこなかつたために、(5) 彼女の完全さが減つてしまつた (*ψέρειν*) ところに ⁸⁰』。

セイド (δέ)、私 (三四ハネ) は曰いた、「キリストよ、『揺れ動く』 (*ἐπιφέρεσθαι*) とはどうござつ意味ですか」。

すると (δέ)、彼は微笑んで言つた、「君はそれが、モーセが¹⁰『水の上に』 ⁸² いひたのと回じ (*κατά*) 意味だと思つのか。否、むしろ (*ἄλλα*)、彼女は彼女の息子に生じた悪 (*κακία*) と反逆 (*ἀπορρασία*) とを見たのである。彼女は後悔 (*μετανοεῖν*) し、無知の暗やみの中を往きつ戻りつしながら、(15) 自分を恥じ始めた (*ἀρκεσθαι*) が、敢えて (*τολμᾶν*) 立ち帰らざる、むしろ (*ἄλλα*) 往きつ戻りつしていたのである。それで (δέ) 彼女の往きつ戻りつ、これが『揺れ動く』 (*ἐπιφέρεσθαι*) ところ ⁸³ となのだ。²⁰ やがて、母親から或る力を受取つた後も、(46[—]) 彼、すなわち、この自惚れ者 (*αὐθάδης*) は、多くの者、すなわち、彼の母より (やうに) 上に置かれている者たちのことを知らないままであつた。何故なら (*γάρ*) 彼は、彼の⁽⁵⁾ 母親が一人そこにいるものとばかり思い込んでいたからである。彼は自分が造り出した天使 (*ἄρρελος*) の無数の群を見て、彼らに対しても優越感に浸つた。しかし、その母親は、(10) この暗やみの中での流産が不完全である——というのも、彼女の伴侶 (*αὐτὸν*) が彼女に同意 (*συμφωνεῖν*) してこなかつたからである——と気が付いた。その時、彼女は後悔 (*μετανοεῖν*) し、激しく泣いた。(15) 彼女の後悔 (*μετάνοια*) の祈りを彼は聞いた。そして彼女のために兄弟たちが (代へて) 願つた。それを聖なる見えざる (*ἀόρατον*) 瞳 (*πνεῦμα*) が承認 (*κατενέψειν*) した。(20) 彼、すなわち見えざる (*ἀόρατον*) 瞳 (*πνεῦμα*) は (47[—]) 同意して首肯した (*κατανεύειν*) 後、彼女

の上に完全さの中から（或る）靈 (*πνεῦμα*) を注ぎかけた。彼女の伴侶 (*αὐτούρος*) が彼女の欠乏を回復するためには、彼女のもとへ到来した。彼は「プロノイア」(*πρόνοια*)⁸⁶を通して彼女の欠乏を回復することに決めた。そして彼女（ソフィア）は彼女本来のアイオーン (*αιών*) へは引き挙げられず、むしろ (*ἀλήθη*)¹⁰ 彼女において明らかとなつたとりわけ大きな無知のゆえに、彼女の欠乏を回復するまでの間、第九の天⁸⁸にとどまつてゐるのである。一つの声が彼女のもとへ届いた、(15)『人間』と「人間の子」⁸⁹が存在する』と。

心魂的人間の創造 47₁₆ — 52₁₁

ところが (δέ)、これを第一のアルコーン (*ἀρχων*)・ヤルダバオトが聞いた。彼はその声が(20)「高きところから」やつてきたものだとは考えなかつた。(48₁) 聖なる完全なる (*πέλεος*) 父、すなわち第一の人間が、人間の姿で自分を彼（らに教えた）。至福なる者 (*μακάρος*)⁹¹ は(5)彼の外見を彼らに現した。すると七つの権力 (*ἐξουσία*) のアルコーンたち全体 (*ἀρχοντική*)⁹² が首肯いた (κατανεύειν)⁹³。彼らは水の中にその像 (*εἰκών*) の形を認めて、(10)互いに言った、『我々は神の像 (*εἰκών*) と外見に従つて人間を造ろう』。彼らはお互いの間から、(15)また彼らのあらゆる勢力と一緒に（それを）創造した。彼らは自分たちの間から一つの「しるし物 (*πλάγμα*) を造り上げた (*πλάσσειν*)。そして、かの勢〔力〕たちのい〔ず〕れ〔も〕が、(49₁)⁹³ (人間の)「心魂 (*ψυχή*)」のために「しる」と能〔力〕を〔造り出した〕。彼らはそれ（三人称・女性・単数=心魂）を、彼らが見た像 (*εἰκών*) に従い、(5)太初から存在する者、すなわち、完全なる (*πέλεος*) 人間を模倣 (*μίμησις*) しつゝ (κατά) 造つた。彼らは言つた、『彼をアダムと名付けよう。彼の名前と力とが我々にとって光となるよう』。そして(10)勢力たちは下から始めた (*ἀρχεσθαι*)。第一は「神性」で、（彼女が造つたものは）骨の魂 (*ψυχή*)⁹⁴ である。第二は「支配」で、腱の魂（—*ψυχή*）である。第三は(15)「火」で、肉

(σάρξ) の魂 (ψυχή) である。第四は「アロノイア」(πρόνοια) で、髓の魂 (ψυχή) やよび身体 (σῶμα) の全構造である。第五は「王國」⁵⁰⁻ で、(50-) 「血」の魂 (ψυχή) で「おる」。第六は「理解」(σύνεσις) で皮膚の魂 (ψυχή) である。第七は「知恵」(σοφία) で、髪の魂 (ψυχή) である。⁵¹⁻ 彼らはその身体 (σῶμα) 全体を飾りつけた(*κοσμεῖν*)。そして彼らの天使たち (*ἄγγελος*) も彼らに加わった。そして彼らは、諸力たち (*έξουσία*) によって初めに先ず心魂的実体 (*—ψυχή, ὑποστάσεις*) ⁹⁸ として準備されたものから、(10) 肢体 (*μέλος*) ⁹⁹ と関節 (*άρθρος*) の秩序を (作り出した)。そして繋り合つた (*δημάρκειν*) 身体 (σῶμα) 全体が、私がすでに名前を挙げた天使たち (*ἄγγελος*) の群によつて造り出され ¹⁰⁰ た。¹⁰¹ ところが、彼 (アダム) は長い間動けない (*ἀργοῦ*) ままであつた。といつのは、七人の諸力 (*έξουσία*) も、「肢体の関節?」を整えた三六〇人の天使たち (*ἄγγελος*) も、(51-) 彼を立て起にすことができなかつたからである。¹⁰² さて、「あの母親は」(彼女の) 多情 (*προύνικος*) ゆえに、かのアルコーン (*ἀρκων*) に与えてしまつた力を「再び取り戻したいと欲した」。¹⁰³ 彼女は惡意 (*—κακία*) なしにやつてきて、(5) 万物の父、すなわち憐みに富む者、光の神に願い求めた。彼は聖なる決定に基いて「アウトゲネース」(*αὐτορεψίς*) と(10) 四つの光を、第一のアルコーン (*ἀρκων*) の天使たち (*ἄγγελος*) の姿で送り出した。彼らは彼 (第一のアルコーン) に助言したが、それは (*ώστε*) (他でもない) 彼の中からあの母親の力を抜き取るためであつた。(すなわち) 彼らは彼にこう言つたのである、(15) 『あなたの中にある息 (*πνεῦμα = 霊*) を彼 (アダム) の顔に吹き込みなさい。そうすれば、この物は立ち上るでしょう』。そこで彼は (アダム) に自分の氣息 (*πνεῦμα*)——これは母親から (由来する) あの力のことである——を(20) その身体 (*σῶμα*) の中へ吹き込んだ。すると「その瞬間に」¹⁰⁵ 彼は動いた。(52-) すると直ちに「他の」諸力 (*έξουσία*) も「妬み始めた。彼は彼らすべてによって存在するようになったのであるから。¹⁰⁶ 彼らが(5) その人間 (アダム) に、彼らに由来する諸々の力を与えていたのであり、彼は七つの諸力 (*έξουσία*) の心魂 (ψυχή) と彼らの (その) 力をもつて

(φορεῖν) いたのである。(それにも拘らず) 彼の知力¹⁰は彼らすべてよりも、また、プロートアルコーン (*πρωτάροκην*)¹⁰⁸よりも強大になつた。

光の力とやみの力の角逐 52¹¹—64¹³

やうに (*δέ*) 彼らは、彼が悪 (*κακά*) から自由である」と、また彼らよりも賢く、光に移つてしまつてゐるのに気付いた。⁽¹⁵⁾彼らは彼を捕えると、物質 (*ὕλη*) 界全体の底の部分 (*μέρος*) へとでも摺つていつた。しかし (*δέ*)、至福なる (*μαράρος*) 父は憐みに富んで善を行ふ者である。⁽²⁰⁾彼は「プロートアルコーン (*πρωτάροκην*)」から「(今や) 引き抜かれてしまつた母親の」¹⁰⁹ (*53¹*) 力を憐んだ。それはそれ (＝力) があの身体 (*σῶμα*) の上に支配するようになるためであつた。⁽⁵⁾彼は善なる、憐みに富む靈 (*πνεῦμα*) を送つた。¹¹⁰ (物質界へ) 最初に下つてきて、アダムと名付けられた者の助け主 (*Bούθος*)¹¹¹として。^(すなわちそれは) 光のエピノイア (*ἐπίνοια*) であり、⁽¹⁰⁾彼 (アダム) によつて「ゾーハー」 (*ζωή*)¹¹² と呼ばれた者である。さて (*δέ*)、彼女こそは全被造物に働きかける者である。それ (被造物) と共に労苦して、それ本来の神殿へと立て起こし、⁽¹⁵⁾その欠乏が下つてきた (由来について) 説き明かし、その昇つてゆくべき道を示すことによつて。そして、光のエピノイア (*ἐπίνοια*) は彼 (アダム) の中に隠れていた。それは⁽²⁰⁾アルコーン (*ἄρκων*) たちが氣付かず、むしろ (*ἀλλά*)¹¹³ (*54¹*) 我々の姉妹、我々に [等] しい 「知恵」 (*αοφία*)¹¹² が、光のエピノイア (*ἐπίνοια*) によつて、彼女の過失を正 [す] ためであつた。⁽⁵⁾かの人間は、彼の中に在る光の影のゆえに光り輝いた。彼の思考は彼を造つた者たちよりも高まつた。彼らは同意した (*κατανεύειν*)。 (そして)⁽¹⁰⁾かの人間が彼らよりも高くなつたのを見た。彼らはアルコーン (*ἄρκων*) たちに属する全天使の群 (*ἄρχελυκή*)、および彼らのその他の勢力たちと協議した。そこで (*τότε*) 火⁽¹⁵⁾と土と水と炎とが互いに混り合つた。それらは四つの風と一緒に

投げ込まれて、火のように吹き荒れ、互いに結合し合いながら、(55⁻) 「大いなる」震動を「巻き起こした」。〔彼らは彼を〕死の影の中へ〔連れ込んだ〕。彼らは再びまた別のこしらえ物 (*πλάσις*) を、土⁽⁵⁾と水と火と風 (*πνεῦμα*) から造り出した。とはすなわち、物質 (*ὕλη*)、暗やみ、欲望 (*ἐπιθυμία*)、および反逆の靈 (*ἀντικείμενον πνεῦμα*) から。これこそ、鎖、(10)身体 (*σῶμα*) のいしらえ物 (*πλάσια*) (ことひい) の墓であり、人間の上に着せ付けて、物質 (*ὕλη*) への鎖となつたものである。これこそ最初の分裂である。(15)しかし (δέ)，第一の (?: *πρώτος*) ¹¹⁴の光の「思考」(*ἐννοια*) が彼の中に在つて、彼の思考を呼びます。第一のアルコーン (*ἄρκων*) は¹²⁰彼を連れ去り、樂園 (*παράδεισος*) の中に置いた。(56⁻) これ(樂園) [について] 彼は、「それが」彼(アダム)にとって無上の歎び (*τραύμα*) 「であるかのように語つたが」、これはつまり彼(アダム)を欺く (*ἀπατᾶν*) ためであった。何故なら (τάρο) 彼¹¹⁵の歎び (*τραύμα*) は苦く、彼らの¹¹⁶麗しさは不法なもの (*ἀνομον*) だからである。彼らの歎び (*τραύμα*) は偽り (*ἀπάτη*)、彼らの木は憎悪であり、彼らの実 (*καρπός*) は癒す術のない毒であり、彼らの約束は¹¹⁷彼(アダム)にとって死だからである。だが (δέ)，彼らの木は『生命の木』として (心の中に) 置かれた。その彼らの生命の奥義 (*μυστήριον*) を私は君たちに告げよう。それはすなわち、模倣の¹¹⁸靈 (*ἀντίγνωστη πνεῦμα*) であつて、彼らに由来し、彼(アダム)をそむけ、彼の完成を知る (*νοεῖν*) ことがないようにするのである。その木とくのは次のような種類のものである。(すなわち) その根は苦く、その枝 (*κλάδος*) は¹²⁰死の影、その (57⁻) 葉は憎しみと偽瞞 (*ἀπάτη*)、その樹液は邪惡 (*πονηρία*) の香油、その実 (*καρπός*) は死の欲望 (*ἐπιθυμία*) であり、¹¹⁹(5)その種子 (*σπέρμα*) はそれを食べる者たちから飲む。¹¹⁸暗黒の世界が彼らの住む場所である。しかし (δέ)，彼らによつて通常¹²⁰『善惡を知るため』と呼ばれるあの木、これはすなわち光のエピノイア (*ἐπίνοια*) のことであり、彼女ゆえに(その木から) 食べてはならぬ、とはつまり、(15)彼女に聞いてはならぬといつ戒め (*ἐντολή*) が発せられたのである。何故なら (ἐπει) もの戒め (*ἐντολή*) は、

彼（アダム）が彼の完成を見上げて、その完成から自分が（失なわれて）裸であることに気付く (*νοεῖν*) ことがないようになると、彼に敵対するものであったからである。⁽²⁰⁾しかし (§6)、「私は彼らが（その木から）⁽⁵⁸⁾食べるようになせたのである。」

私は彼に言った、「キリストよ、彼らを教え（てそうさせ）たのは蛇ではなかつた (*μῆτ*) のですか。」

彼は微笑みながら言った、「蛇は⁽⁵⁾彼女に汚れと滅び（に満ちた）欲望 (*ανθρωπία*) の生殖行為 (*σπέρμα*) を教えたのである。というのも、それが彼（=蛇=ヤルダバオト）にとって益となるためにそうしたのである。ところが彼は、¹²³ 彼女が彼よりも賢く、彼に従わないであろうと気付いた。⁽¹⁰⁾彼は、自分の（の中）から（抜き取られて）彼（アダム）に与えられてしまつたあの力を取り戻したいと思った。彼はアダムの上に忘却をもたらした。¹²⁴

私は彼に言った、⁽¹⁵⁾「キリストよ、忘却とは何のことですか。」

すると (§6) 彼は言った、「それはモーゼが『彼（神）は彼（アダム）を眠らせた』と語ったように (*κατά*) ではなく、むしろ (*ἀλλά*) 彼（蛇=ヤルダバオト）は彼（アダム）の知覚⁽²⁰⁾ (*αἰσθητός*) に被いをかけて覆い、知覚不能 (*ἀναισθητός*) にして ¹²⁵ (59-) 苦しめたのである。それは実に、彼が予言者 (*προφήτης*) を通してこう語つたとおりである。『私は彼らの心の耳を重くしよう。それは⁽⁵⁾彼らが悟り (*νοεῖν*) ず、見る⁽¹⁰⁾ことがないためである。』その時に (*τότε*)、光のエピノイア (*ἐπίνοια*) は彼（アダム）の中に身を隠した。そして彼（ヤルダバオト）は彼女を（アダムの）あばら骨から取り出⁽¹²⁶⁾しつと心に決めた。しかし (§6) ¹²⁷ (10)光のエピノイア (*ἐπίνοια*) は捕え難き者があるので、やみが彼女を追いかけたが、捕えることはできなかつた。彼（ヤルダバオト）は彼（アダム）からあの力を抜き取ることに決め、再び一つのこしらえ物 (*πλάγιο*) を（今度は）⁽¹⁵⁾女の形 (*μορφή*) ¹²⁸で造ることにした。そして彼は（それを）造つて彼（アダム）の前に立たせた。（しかしそれは）モーゼが、『彼はあばら骨を取つて、彼のために女を造つた』¹²⁹ 』

と¹³⁰いたようにではない。⁽²⁰⁾すると直ちに彼（アダム）はやみの酩酊からめおめた (*μῆψεῖν*)。(⁶⁰⁻) 光のエピノイア (*ἐπινοία*) が彼の心の上に置かれていた被いを取り去った。彼は彼の本質 (*οὐδία*¹³¹) を知ったとき、直ちに¹³²立った、『これこそ⁽⁵⁾私の骨の骨、私の肉 (*οἳρος*) の肉 (*οἳρος*)。それゆえには父と母を離れて、⁽¹⁰⁾妻と結び合い、彼らは一つの肉 (*οἳρος*) となるであろう』¹³²。何故なら、彼らはあの母親（「知恵」 = *σοφία*）の伴侶 (*σύντορος*) によって遣され、¹³³ 彼女（母親¹³⁴）を立て起こすであろうから¹³³。この⁽¹⁵⁾ゆえにアダムは彼女（女）を『すべて生ける者の母』と名付けた。¹³⁵ 彼女（母親）を立て起こすであろうから¹³³。この⁽¹⁵⁾ゆえにアダムは彼女（女）を『すべて生ける者の母』と名付けた。¹³⁵

高きところからの委任 (*αὐθεντία*) と啓示に基いて光のエピノイア (*ἐπινοία*) が (⁶¹⁻) その木を使い、鷦 (*ἀετός*) の姿で彼（アダム）を教えて認識を与えた。彼女はその認識から食べ、⁽⁵⁾彼の完成を思い起こすようにと教えた。一人（アダムとエバ）とも無知の欠乏 (*πτώμα*) を身に帯びていたからである。ヤルダバオートは、彼らが自分から離反¹³⁶したことに気付いた。彼は彼らを呪つた。⁽¹⁰⁾しかも (*δέ*) それに加えて (*πορνογένειν*)、男が女を治めるようにした。¹³⁷ しかし彼は、⁽¹⁵⁾聖なる高みの決定によつて（その時）すでに生じていた奥義 (*μυστήριον*) を知らないままにそうしたのである。しかし (*δέ*)、彼らは彼を呪い、彼の無知をあざくことを憚つた。彼の天使たち (*ἄγγελος*) は揃つて (⁶²⁻) 彼らを楽園 (*παράδεισος*) から追放した。彼は彼（アダム）を暗黒のやみで覆つた。その時 (*τότε*)、ヤルダバオートは、アダムの傍に若い女 (*παρθένος*) が立つてゐるのを見た。⁽⁵⁾彼は愚かな思いでいっぽいになり、彼女から（自分の）種子 (*σπέρμα*) を生じさせようと欲した。彼は彼女を辱しめ、（そして）一番田の息子を、続いて同じように (*όμοιως*) ⁽¹⁰⁾一番田の息子をもうけた。すなわち、熊（—*άρκος*）の顔付をしたヤウェと猫の顔付をしたエローラムである。その一方は (*μέν*) 義なる (*δίκαιος*) 者であるが、他方は (*δέ*) 不義なる (*ἄδικος*) 者である。エローラムが義なる者 (*δίκαιος*)、ヤウェが⁽¹⁵⁾不義なる者 (*ἄδικος*) である。彼はその義なる者 (*δίκαιος*) を (*μέν*) 火と風 (*πυρεύμα*) の上に据え、不義なる者 (*ἄδικος*) を (*δέ*) 水と土の上に据えた。これが、⁽²⁰⁾あらゆる人間たちの種族 (*γένεσι*) の間

で、(63¹) カインとアベルと呼ばれて今日〔に〕まで至っている者たちである。この第一のアルコーン (*āρχων*) によって結婚 (*rāmos*) の交接 (*συνουδία*) が生じてきたのである。(5) 彼はアダムの中に生殖 (*στοπά*) の欲望 (*επιθυμία*) を植え付けた。だから (*ωστε*) 、¹³⁹ これ（生殖欲）が彼らの模倣の (*ἀντίνους*) <靈> の影像を生み出してゆくのは、その交接 (*συνάτα*) によるのである。ところで (δέ)，¹⁴⁰ その一人のアルコーン (*ἄρχων*) を¹⁴¹ 彼はあの（四つの）要素 (*ἀρχη*) の上に立てる (*καθιστάναι*)、彼らが（肉体という人間の）墓を支配 (*ἀρχεῖν*) するように (*ωστε*) した。¹⁴² アダムは自分に等しい本質 (*οὐσία*) を知り、セーツをもうけた。すると(15)アイオーン (*αιών*・複数) の天（単数）に住むあの種族 (*γενέα*)（のもとで）と同様、あの母親が彼女のものなる〈靈〉を送った。その靈 (*πνεῦμα*) は、自分に等しい本質 (*οὐσία*) のもとへ到来した。(64¹) 完成（アレーローマ）を手本 (*τύπος*) として、彼らを忘却と墓（肉体）の邪悪 (*κακία*) から呼び起こすために。そしてそれ（靈）はしばらくの間 (*πρόσθ—*) 留まり、(5)（セーツの）種子 (*σπέρμα*) のために働いた。それは、聖なるアイオーン (*αιών*・複数) のもとから靈 (*πνεῦμα*) が到来するならば、その時に (*ὅταν*) その靈が彼らをあの欠乏の外へもたらして、(10)かのアイオーン (*αιών*・单数)¹⁴³ を立て起し、これ（アイオーン）が聖なる完成となり、そこに最早如何る欠乏もなくなるためである。」

人間の相異なる運命 64₁₃—75₁₀

「いや（δέ）、私は言った、「キリストよ、あらゆる（人間の）魂 (*ψυχή*) が(15)混りなき光へと救われるのですか」。¹⁴⁴
彼は私に言った、「君は（今や）大いなる事柄に考へ（ἔννοια）をめぐらすところまでやってきた。それは、(20)かの搖らぐことのない種族 (*γενέα*) から来る者以外 (*εἰ μὴ τι*) には (65¹) 現すことが難しいからである (*ἡσ*)。生命の

靈 (*pneūma*) がその上に到来する者たちは、(5)あの力と結びつけられたのであるから、救われ、完全なる (*téleos*) 者たちとなるであらう。そして彼らはあの大いなる (因の) 光へ昇つてゆくにふさわしい者となろう。何故なら (*rāo*) 彼らは、それら (因の光)と共に、(10)あらゆる邪惡 (*kakia*)、¹⁴⁶ 惡意 (*πονηρία*) の誘惑から清められるにふさわしい者となるからである。その際、彼らは不朽なる (*āptheros*) 集会の¹⁴⁷こと以外には氣を配らず、また、それ (集会) のことを思ひ量り (*μελετᾶ*) ながら、(15)怒り、妬み、貪れ、欲望 (*ἐπιθυμία*) そして飽食を離れる (*Karpis*) である。彼らはこのすべてに、捕えられる¹⁴⁸こと (οὕτε)、またこの中のいづれかに捕えられる¹⁴⁹こともない (οὕτε)。ただ [肉 (*άρρεν*)] のみを例外 (*εἰ μή τι*) として。(66-) といふのは、彼らは何時自分たち (の魂が肉体がら) 古き上げられて、(5)迎えの者たち (*parakallīptων*) によって永遠かつ不朽の生命と (そこ) 召命の尊嚴さの中へ受入れられる (*παρακαλεῖσθαι*) ことになるのか、その時を待ち望む間は、それ (肉) を用いる (*χρῆσθαι*) のである。(10) その際には、彼らは戦ふ (*ἀθλού*) を勝ち抜き、永遠の生命を圖べ (*κληρουμένων*) ために、あらゆる¹⁵⁰ことに耐え (*ὑπομένειν*)、すべてのことを見渡すであらう」。

私は言った、「キリストよ、救いに与るようになると(15)あの力と生命の靈 (*pneūma*) がその中に入った魂 (*ψυχή*・複数) でも、もしこのようにしなかった場合は、彼らはどうなるのですか」。

彼は私に言った、(67-) 「あの靈 (*pneūma*) がその上に到来する者たちは、どのような場合にも (*náunth náunthos*) 生きることになるであらう。そして邪惡 (*kakia*) から抜け出るであらう。何故なら、(なるほど) あの力⁽⁵⁾はすべての人間の中に入つてゆく。というのは (*rāo*) その力なしには彼らは立てないのである。¹⁴⁸ しかし (86)、それ (魂) が生み出されると、その時に (*rōte*) 生命の靈 (*pneūma*) がそのもとへ持たらされるのである。¹⁴⁹ その強く、神的な靈 (*pneūma*) が生命を与へるべく到来した場合には、それはあの力——とはすなわち魂 (*ψυχή*) のことである——を強め¹⁵⁰」。

るのが常であり、魂は（あはや）悪 (*πονηρία*) の中へ迷い込むことがない。だが (δέ), (15)あの模倣の靈 (*ἀντίμυων πνεῦμα*) がその中へ到来する者たち (の場合には)、魂はこれ（模倣の靈）によって誘惑されて、迷いつてしまつ (*πλανᾶσθαι*) のが常である」。

セイで (δέ) 私は言つた、「キリストよ、〔〕のような者たちの〕魂 (*ψυχή*) ですが、(68-) それ（複数）は肉 (*σάρξ*) を離れた後 (*διπλῶν*)、〔〕しくゆくことになるのですか」¹⁵³。

すると (δέ) 彼は微笑んで言つた、「模倣の靈 (*ἀντίμυων πνεῦμα*) にはるかに (*μᾶλλον*) もやつてこた魂 (*ψυχή*) ——(5) とはすなわち、あの力——のための場所へ (ゆくであらう)。¹⁵⁴ 〔〕の魂は強く、悪 (*πονηρία*) のわざを離れ、(10) 不朽なる (*ἄφθαρτον*) 配慮 (*ἐπικοπή*) によつて救れ、アイオーン (*αιών*・複数) の安息 (*ἀνάπαυσις*) の中へ引き上げられるであらう」。

そこで (δέ) 私は言つた、「キリストよ、万物を認識しなかつた者たち、(15)彼らの魂 (*ψυχή*) はどうなのですか。また (7) それはどうくゆくことになるのですか」。

彼は私に言つた、「その者たちは、模倣の靈 (*ἀντίμυων πνεῦμα*) が彼らを躊躇させて、(69-) やの上から覆いかぶさつてしまつたのである。そのようにしてそれ（模倣の靈）は彼らの魂 (*ψυχή*) を抑えつけ (*Bαρεῖν*)、悪 (*πονηρία*) のわざくと引き摺つてゆき、(5) つして忘却の中へ連れ込んでしまつのが常である。され（魂）が着物を脱ぐ時には、彼（模倣の靈）は、かの（第一の）アルコーン (*ἄρχων*) の下に生まれた諸力 (*ξένοια*) の手にそれ（魂）を引き渡す (*παραδίδονται*)。彼らは彼ら（魂・複数）を再び (*πάλιν*) 鎖に繋ぐ。彼ら（魂）は忘却の中から救い出されて認識を得、いつしに完全にわれて救われるその時まで、やの鎖と共に手を摺りまわされるのである」。

セイで (δέ) 私は言つた、「キリストよ、(15)のようにして (*πώς*) 魂 (*ψυχή*) は少しづつ収縮し、再び母親、ある

いは（彼）夫の自然（の身体）(*φύσις*)の中に入つてゆくのですか」。

すると（δέ）彼は、私が尋ねたとか、喜び、そして言った、（70^一）「[君]には幸い (*μακάριος*) にも理解力 (*πραόκολονθης*) がある。それにその理由で、彼らは、生命の靈 (*πνεῦμα*) がその中に宿っている別の者と一緒に置かれ、（5）¹⁵⁸ その者に信徒 (*ἀκολούθης*) するのである。¹⁵⁹ それ（魂・単数）は彼に聞くことによって救われることになっている。それはもはや (*μέρτοι τε*) もうに別の肉 (*σῶμα*) の中へ入り込むことがない」。

私は彼に言った、「キリストよ、でも（δέ）確かに認識はしたもの、（10）離反してしまった者たち、彼らの魂（ψυχή）はどうですか」。

彼は私に言った、「彼らはゆくであらう、貧困の天使たち (*ἄγγελος*)、すなわち何の悔改め (*μετάνοια*) も生じなかつた天使たちが引きさがつて (*ἀνακωρεῖν*) ゆくであらう場所へ。彼らは刑罰 (*κολάσεων*) を受けぬまでも（15）拘禁されているであらう。聖なる靈 (*πνεῦμα*) を汚した者はすべて、（71^一）永遠の刑罰 (*κόλασις*) の拷問 (*βασανίσεων*) にかけられるであらう」。

そこで（δέ）私は言った、「キリストよ、その模倣の靈 (*ἀντίτυπον πνεῦμα*) は一体どうからやつてきたのですか」。

（5）彼は私に言った、「憐みに富む母と聖なる靈 (*πνεῦμα*)、すなわち慈悲深く我々と共に労する者——これは光の（10）エピノイア (*ἐπίνοια*) のことである——および彼（聖なる靈）がこの完全 (*τέλεος*) かつ永遠なる光の人間の種族 (*γένεα*) に属する人間たちの思考の中に呼びさました種子 (*σπέρμα*) が〈……〉¹⁶² した時、（15）プロートアルコーン (*πρωτάρχων*) は気付いた、それ（光の人間の種族）が彼らの知恵の高さにおいて彼にまさっていることに。彼は彼らの思考力を捕えようと欲した。彼は無知なる者であったので、（72^一）彼らが彼よりも賢いことを知らなかつたのである。彼は彼の諸力たちと協議した。彼らは宿命 (*εἰμαιομένην*) を生み出し、（5）度量と時間と時点によって天（複数）の

神々と天使たち (*ārrelos*) と諸々の悪靈 (*daimon*) と人間たちを拘束して、これらすべてがその（宿命の）鎖に服し、
(10)宿命がすべてのもの上に君臨するようになつた。——惡意に満ちてゆがんだ計略である。そして彼は彼によつて生じたすべてのものを悔いた。¹⁶³彼は、人間のあらゆる傲慢 (*ānōsteia*) の上に(15)洪水 (*kataklusmós*) をもたらすことに決めた。¹⁶⁴しかし、「アロノイア」 (*proónia*) の大いなる者——とはすなわち、光のエピノイア (*ēpínoia*) のことである——が(73-)ノアに知らせた。彼（ノア）は人間たちに（そのことを）告げ知らせたが、彼らは彼を信じなかつた(*āποτείν*)。それは、モーゼが(5)『彼は方舟 (*κυβωτός*) に身を隠した』¹⁶⁵とたようにではなく、むしろ (*āllá*) 〈彼〉（ノア）はある場所 (*tópos*) に隠れた (*σκεπάζειν*) のである。ただノアひとりだけではなく、むしろ (*āllá*) 揺らぐことのない種族 (*γένεα*) の（多くの）者たちも(5)ある場所 (*tópos*) へゆき、（そこ）光の雲で身を包んだ (*σκεπάζειν*) のである。そして彼（ノア）は彼と一緒にいた者たちと共に、彼の支配を認識した——(15)彼らを照らす光の中で。¹⁶⁶何故なら、地上のあらゆる物の上には暗やみが注がれていたからである。彼（ヤルダバオート）は彼の天使たち (*ārrelos*) と共に決議した。(74-)彼らは彼らの天使たち (*ārrelos*) を人間の娘たちのもとへ送つた。それは彼ら（天使たち）が彼女たちから子孫 (*σπέρμα*) を生じさせ、(5)享樂するためであつた。彼らは初め成功しなかつた。(そこで)彼らは全員が集つて、模倣の靈 (*āntípsou πνεῦμα*) を造り出すことに決めたのである。その際、彼らは（上から）(10)下ってきたあの靈 (*πνεῦμα*) のことを念頭に置いていたのである。¹⁷¹そして天使たち (*ārrelos*) は彼らの姿を彼女らの夫の姿に変え、彼女たちを〈她的〉靈 (*πνεῦμα=模倣の靈*) で満足させた。¹⁷²この靈は彼女たちを(5)暗やみで一杯にした。¹⁷³彼らは惡意 (*πονηρία*) から、金、銀、贈り物 (*δῶρον*)、それに銅、鉄、その他あらゆる種類 (*γένος*) の金属 (*μέταλλον*) を彼女たちに持参して、(75-) 彼女たちを誘惑 (*περιπούσα*) したので、彼女たちは自分たちの搖らぐことのない「アロノイア」 (*πρόνοια*) のことを想ひ起こさなかつた。そして彼らは彼女たちを取つて、(5)彼らの模倣の靈¹⁷⁵

(ἀντίμημον πνεῦμα) による暗やみの子¹⁷⁵を生ませた。彼らの心は閉ざされてしまい、模倣の靈 (ἀντίμημον πνεῦμα) によつてかたくなにわれて、今日に至るまでもかたくなになつたままである。

結び 75¹⁰ — 77⁵

(10) もと今や、その褒むべき者、すなわちあの父母なる者¹⁷⁶、あの憐みに富む者が彼女の子孫たち (*σπέρμα*) の間に形 (*μορφή*) を取る。¹⁷⁷ 最初に私はあの完全なる (*πέλειος*) アイオーン (*αιών*) のめぐく昇つた。だが、(δε) 私が(15)君にこのことを話すのは、君がそれを書き留めて、君と回じ靈の者たち (*δυόπνευμα*) に秘かに伝えるためである。何故なら (*ráo*) いの奥義 (*μωσῆμον*) は、(20) 揺らぐことのない種族 (*γενέα*) のものだからである。(76¹) もと (δε)、あの母はもう一度私より先にやつてきた。¹⁷⁸ これらが彼女がこの世 (*κόσμος*) で行つたことである。彼女は彼女の子孫 (*σπέρμα*) を立て(5)起¹⁷⁹こした。私は君たちに、(今から後) 起きぬることを告げよう。何故なら (*kai ráo*) 私が君にこれらのこと¹⁸⁰を与えたのは、君がそれを書き留めるため、(また) それがしっかりと預け置かれるためである。それから (*tóte*) 彼は(10)私に言つた、「これらのこと¹⁸¹を贈物 (*δῶρον*)、あるいは (ἢ) 飲み物、あるいは (ἢ) 何かその類のもののために渡す者は(15)誰であれ呪われよ」。彼はいの奥義 (*μωσῆμον*) を彼 (ヨハネ) に伝えると直ちに彼の前から消え去つた。そして彼 (ヨハネ) は (77¹) 彼の仲間の弟子 (*—μαθητής*) たちのもとへ行き、(5) 救い主 (*σωτήρ*) によつて彼に告げ知られたことを語り伝え始めた (*ἀρχεσθαι*)。